



行事案内

催し物展

- 山形のおしぼ展

12月13日(出)～2月1日(日)

- 新収蔵品展 2月14日(出)～4月5日(日)

研修会

- 山形県内博物館職員研修会

2月13日(金)

10周年を迎える

46年4月の開館以来、本館は地域の文化・学術等の発展向上に大きな役割を果たしてきました。特に、10年の歳月で、10数万点にのぼる「郷土色豊かな博物館資料」を収集し、保存できたことは、全国にも類のない快挙といわれています。しかもその資料が学芸員の真摯な研究調査に裏打ちされ、博物館活動のいろいろの場面で効果的に活用されており、「生きた博物館資料」の「活用の仕方」として注目されています。

かかる数多くの業績を蓄積しながらも多様な課題をかかえ、本館は10周年という記念すべき節目を迎えることになりました。これを機会に、本館の歩んだ道筋をつぶさに吟味するとともに、現状を直視し、「地方の時代」に呼応し、「博物館像」について、多くの県民と語りあいたいものです。

ニホンカモシカの生態と食害防止の調査（中間報告）

本館では、昭和55年度から4か年計画で、山形大学をはじめ、県内専門家の協力をえて、ニホンカモシカの調査を実施しています。

その主なねらいは、①特別天然記念物ニホンカモシカの食害を防止する具体的な方法を見いだすこと。②現在、ニホンカモシカは「種」として特別天然記念物に指定されていますが、昭和58年ごろからは「地域指定」に変更されることが予想されています。そのために生態と分布に関する資料を整えておくこと。③動物に関する野外での生態調査法を確立すること、等です。

本年度は、船形・神室山系でのニホンカモシカの生態と生息頭数の肉眼による調査をはじめ、無線発信装置等の機器による生態及び食害防止の調査を実施する試験区を設定するための調査が実施されます。

これまでの調査状況

蔵王山系で予備調査を実施しました。山形市西蔵王地区の神尾・土坂で、聞きとり調査により、試験区の候補地として土坂・大平・八森地区を選び、次のように調査をしました。

1. 期日 第1回 11月5・6・7日（3日間）
第2回 11月27・28日（2日間）
2. 地域 第1回 上記地区内に250m四方の区画30を設定、うち9区画を調査（面積225ha）
第2回 同上、10区画を調査（面積250ha）
3. 内容 第1回 生活痕跡の分布状況調査（糞・足跡・けもの道・角こすり跡・食痕・目撃など）
第2回 区画法による生息頭数調査
4. 調査者数 第1回・第2回 合計23名（5日間、延78名）



目撃したカモシカ



角こすり跡

第1回 生活痕跡の分布状況調査概要

第1回の調査項目の細部は、次の内容でした。

- (1)糞塊についての調査項目 一回糞・タメ糞・糞粒数、斜面の方位 林相など。
- (2)足跡・けもの道についての調査項目 数・大きさ・場所・道の長さ・斜面の方位・林相など。
- (3)角こすり跡についての調査項目 大きさ（幅・長さ）・地面からの高さ・樹種・樹高・樹径など。
- (4)食痕についての調査項目 種類・被食の程度・地面からの高さ・林相など。
- (5)目撃についての調査項目 頭数・大きさ・毛の色・発見場所・行動内容など。

調査の結果は、どの区画でも生活痕は豊富で、(3)の角こすり跡は、26の樹種でみられ、多いのはキリ・ヤマボウシ・ミズキ・ウワミズザクラ・イタヤカエデなどでした。

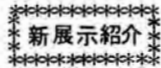
(4)の食痕は、確認に困難な季節でしたが、27種で観察され、その中で、栽培・植栽されているのは7種で桑が多く、大根・白菜・カブ・花キャベツ・杉・牧草など多くの種類に認められました。

(5)の目撃は、6頭で、第2回でも10頭目撃でき同地区の生息密度は高いことがわかりました。

本調査の結果は、生態調査法の開発やニホンカモシカの保護と食害防止の基礎資料として期待されます。



食痕（大根）



旧石器時代・縄文時代・古墳時代の

人々の生活情景イラスト

新装なった第2展示室に、旧石器時代・縄文時代・古墳時代の人々の生活の様子を描いた3枚のイラストがあります。それぞれの絵とも、その時代を特徴づける場面を設定し、考古学上の綿密な考証が重ねられており、しかも、画家として一流の河西昭治氏（一水会々員）の筆によるもので、絵画としても立派なものです。今回は、これら3点のイラストについて紹介します。

1 月山山麓のナウマン象狩り（旧石器時代）

人類が出現してから、土器を使うようになった約1万年前までを旧石器時代といい、おもに、ナウマン象などの動物を狩って暮らしていました。気候は、今よりも寒冷で、火山活動も活発で、山形盆地・米沢盆地・新庄盆地には、湖や湿地が広がり、その近くの台地や段丘などに旧石器人が、テントを張って生活していたものと考えられています。

この絵は、約2万年前に、月山山麓で生活していた旧石器人が、晩秋の頃、ナウマン象を狩っている様子を描いたものです。群れからきりはなし、湿地に追い込んだナウマン象を、旧石器人が木槍や石など、おもいおもいの武器で攻撃しています。遠くでは、ナウマン象の一群が、そこから離れきれずに、じっとこのようすを見えています。ずっと遠方には、月山が、現代とはほとんど変わらない雄大な姿で、そびえています。



2 熊ノ前むらの秋（縄文時代）

縄文時代になると、人々は、はじめて土器と弓矢を使うようになり、竪穴住居に住み、石器や骨角器で、四季おりおりの動植物を食べて暮らしていました。山形県庁前の熊ノ前遺跡からは、縄文時代の竪穴住居跡や土器・石器がたくさん発見され、当時の人々の生活を復原する資料が得られています。

この絵は、熊ノ前遺跡に住んだ約4千年前の縄文人の秋の暮らしを描いたものです。村には、竪穴住居があり、その前で、女の人が、この秋に収穫したドングリを、アク抜きし、粉にする作業に忙しく働いています。遠くには、土器造りをする女や犬と遊ぶ子供、そして狩ったけものや魚を運ぶ男が見えます。村の周囲やうしろの千歳山の植生は、雑木林や松で、今とほとんど変わらないようです。



3 鳴むらの秋（古墳時代）

古墳時代には、山形にも、稲作が広く普及し、竪穴住居と倉庫をもつ農村が各地に見られるようになりました。山形市鳴遺跡からは、建物跡や木器・土器・装飾品・植物の種子などがたくさん発見され、古墳時代終り頃の人々の暮らしを具体的に復原する手がかりが得られています。

さて、この絵は、今から約1,300年前の鳴遺跡の人々の暮らしを描いたものです。竪穴住居と倉庫からなる村の前方には、水田が広がり、そこでは、稲刈りが盛んで、倉庫の前では、脱穀も行われています。見回りの馬に乗った村長の姿も見えます。遠くには、山頂に雪を冠った竜山などの山々がそびえています。



資料紹介

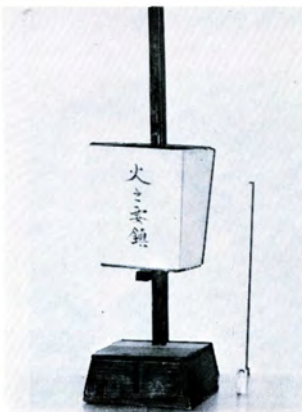
ろうそくと燈火具

火の破壊力と清浄力に対して、人びとは畏敬の念をもち、火を神としてあがめ、やがて日常生活にも利用するようになりました。火を使って暖をとったり、調理したりするくらしの中で、けもの・魚や木の実などに含まれる油が燃えることを知り、闇を照らすあかりとして利用をはじめ、いろいろな燈火具が作られました。さらに、人びとは、動植物の油を加工して保存することも知り、ウルシやハゼの実から油を絞り、加工してつくるろうそくも作られました。

山形県では、江戸時代には山形や鶴岡などは有名な、ろうそく産地でした。ろうそくは、古くは植物の油・鯨油が主原料でしたが、最近では、欧米から輸入したパラフィンが主原料で、芯には、イグサのしんや和紙などが使われます。とくに、植物の実で作られたろうそくは、無臭で明るく、保管も簡単なため、広く利用され、ろうそくを用いる燈火具も、いろいろな形のもので作られるようになりました。

その古いものとして燭台があり、奈良時代に仏具として中国から伝わったものといわれています。山形県には、室町時代の天文7年(1538)に、河北町谷地の刀工俊吉が作った燭台が、西川町睦合の長登寺に保存されています。この燭台は、寒河江市の慈恩寺のものと同型で、県内で作られた燭台では、もっとも古いものと考えられます。鉄製で、三脚にろう受皿が付き、高さ40cmあり、仏具の一つです。この頃には、ろうそくは、中国産のろうそくが使われていたと考えられています。

江戸時代になると、燭台の材料は、鉄だけでなく、唐金や真鍮などのほか、木製のものも見られるようになり、仏具から、くらしの燈火具に使用されるようになりました。また、油を使っていた



ろうそくあんどん

支柱の中間に細い切れ目があり火ぶくろの部分が上下に動くように工夫されている。台座には引き出しがついており、ろうそくをしまっておいた。高62cm



小田原提燈

行燈にも、ろうそくをともすようになりました。

しかし、燭台や行燈は、持ち運びが困難なため持ち運びのできる小さな手燭や雪洞(ぼんぼり)が作られ、このほかに、携帯用として便利ながんどうがありました。がんどうは、ろうそくを立てる部分が回転し、縦・横にしても、ろうそくの火が何時も上になるように工夫され、光も一直線に照らすので重宝がられました。また、掛け燭として、祭日に掲げられる御神灯(御祭灯ともいう)やたんけい(短檠)があり、家紋・屋号・番号などが浮彫されており、町家・寺・旅館などの柱に掛けて使用していました。

ろうそくを用いる燈火具で、最も普及したのは提燈です。江戸時代以前は、つる製の円筒形で折りたたみができず、折りたためる提燈は江戸時代から普及しました。筒(はこ)提灯は伸縮自在で、直径が30cmぐらいの円筒形で、縮めると盆と同じようになり、大地主・豪商・寺社などで使われました。また、弓張提燈は、長い円筒形の提燈で、幅2cm・厚さ5mmの竹を支柱とし、伸ばす支えとして鎖が使われています。県内の豊かな家には、たいてい3~5個位備えられ、家紋入りの上等なものも多く、客人の送迎・火事などの時には、竹ざおの先につけ、家の存在を誇示することから、高提燈ともいわれています。提燈で最も普及したのは、ぶら提燈と小田原提燈です。ぶら提燈は、直径1cm、長さ50cmぐらいの細い竹に提燈をぶらりと下げ、隣家を訪ずれたりするのに使い、小田原提燈は、馬車引きが使ったりしたことからバクロウ提燈とも呼ばれたもので、長旅の燈火具としては欠かせないものでした。このほか、提燈には町家で使う蔵提燈、武士の使う馬上提燈・農家で普及した六角行燈など多くの種類があります。

高等学校郷土・科学クラブ(部)研究発表会

昭和55年度の高等学校クラブ(部)研究発表会は、郷土クラブが11月9日(日)、科学クラブが県高校文化連盟との共催で同30日(日)に、本館の講堂、学習室、特別展示室で開催され、盛会裡に終了しました。

この研究発表会は、クラブ(部)活動の充実と研究の交流、研究水準の向上をねらいとして開いているもので、今年度で、郷土クラブは5回目、科学クラブは4回目(高校文化連盟との共催では2回目)を迎えます。

今回は、郷土クラブが11校11テーマ、科学クラブが14校15テーマと、1クラブ1テーマを原則としたこともあって、例年よりやや少な目でしたが地についた、すぐれた研究が数多く発表されました。

発表会には、クラブ員や顧問はもちろん、先輩や、今回発表を見送ったクラブの部員なども参加して、真剣な質疑が展開され、講師の先生方からは、懇切丁寧な指導・助言をいただきました。

申込み期限に遅れたため発表を見送らざるをえなかったクラブがいくつかあったのが残念でしたが、発表機会の少ない両クラブにとって、有意義な会だったようです。テーマ及び発表校は次のとおりです。

郷土クラブ(部)研究発表会(参加者 135名)

- 講師 山形大学教授 横山昭男先生
県教育センター所長 板井角也先生
県教育庁指導課指導主事 高橋賢一先生
- 研究テーマ及び発表校
- 虫送り・神送り 米沢東高校 社会部
- モリの山 その2 酒田北高校 社会研究部
- 雑木山から杉山へ一最上郡真室川町及位地区塩根川流域の場合一 山形商業高校 産業調査部
- 低湿地村落の一断面一河北町荒小屋部落を例として一 寒河江高校 社会部
- 農村の現状一真室川町安楽城地区一 真室川高校 郷土史部
- 新庄市における「克雪」について 新庄北高校 地歴部
- 山形市内の庚申塔 山形中央高校 郷土研究部
- 山形市街の発展 山形東高校 郷土研究部
- 米沢商業高校沿革史(前篇) 米沢商業高校 社会科学部
- 置賜地域におけるキリシタン信仰について 山形北高校 郷土研究部



旧小国街道における経済流通

鶴商学園高校 郷土研究部

科学クラブ(部)研究発表会(参加者 139名)

- 講師 山形大学助教授 伊藤健雄先生
県高教研理科部会長 後藤孝夫先生
県教育センター指導主事 伊藤 修先生
- 研究テーマ及び発表校
- わら焼きについて 第二報 新庄南高校 生物部
- オナモミについて 酒田中央高校 生物部
- アゲハチョウの蛹色の決定要因 山形中央高校 生物部
- カイエビを中心とした水田の淡水動物群集における泥もぐり行動の役割 酒田東高校 生物部
- ダンゴムシの研究 酒田北高校 科研部
- 大沢川の水収支と水温に関する考察一1974年～1979年の融雪期を中心として 真室川高校 科学部
- 鳥海山の万年雪の研究 余目高校 地学部
- 五色沼(一切経山)の水温形成について 米沢中央高校 科学部
- 朝日村砂川の化石多産地域のたい積環境について 山添高校 科学部
- 新庄盆地並びに尾花沢地域の火砕流の起源に関する研究一今神カルデラの研究に関連して一 酒田西高校 地学部
- 1980年ペルセウス座流星群観測結果報告 日大山形高校 地学部
- 落下と「はね」 温度による液体の比重の変化について 天童高校 理化研究部
- 種々の材料による電池の性能について(第2報)一濃淡電池の放電特性一 山形南高校 科学部
- 内川の水質検査 鶴岡工業高校 化学部

日本学生科学賞応募作品展

今年度で24回目をむかえた日本学生科学賞の作品展を、11月15日から21日まで開催しました。

開催に先立ち、県内審査が行われ、つぎのように最優秀賞・優秀賞作品が選ばれ、21日表彰式が行われ、最優秀賞の作品が中央審査に出品しました。

<最優秀賞>

－中学校の部－

「浮巢沼の水色に関する研究」

山形六中 郷土研究部

「酒田の環境 第8報」

酒田一中 理科部

「フタモンアシナガバチの研究」

酒田二中 土門馨樹

－高等学校の部－

「大沢川の水収支と水温および水質に関する考察」

真室川高 科学部

「カイエビを中心とした水田の小動物群にみられる泥もぐり行動の役割」

酒田東高 生物部

「陸水から探る火山活動－五色沼（一切経山）の水温形成について－」

米沢中央高 科学部

<優秀賞>

－中学校の部－

「カタツムリの研究」酒田二中・久保田香織、



「大山上池・下池におけるプランクトンの研究」酒田四中・科学部、「平田町の自然第Ⅱ報」平田町飛鳥中・科学部、「金峰山の古環境」鶴岡三中・生物部、「川原の土壌動物と端脚目について」松山中・生物部、「最上公園における第一お堀の研究」新庄中・鏡彰広。

－高等学校の部－

「太陽黒点における短周期的変化の解析」酒田東高・佐藤勲、「鳥海山の万年雪の研究」余目高・地学部、「庄内北部におけるトウホクサンショウウオの研究」遊佐高・那須和明、「温度差による液体比重の変化について」天童高・矢口育子、「黒松林と昆虫」酒田中央高・生物部、「藤島川の水質及びプランクトン調査」庄内農高・生物部。

最優秀賞6点のうち中央審査の結果、山形六中の作品が一等賞、米沢中央高の作品が二等賞と、すばらしい成績をおさめました。

「郷土と歴史」講座終る

本館主催の講座の1つ、「郷土と歴史」講座は、本年度も、9月5日(金)に横山昭男氏(山形大学教授)の「山形の地域史研究」、同19日(金)に北畠教爾氏(県史編さん主査)の「慈恩寺の文化」10月18日(土)に本館の保角学芸員の「出羽の古代を掘る」、11月15日(土)に金山学芸員の「近世の村」、12月5日(金)に安彦好重氏(県民俗学会常任理事)の「山形の地名伝説」と、5回にわたって行われました。

今年度は、140名余の受講希望者があり、100名を越す受講者の時もあるなど、会場は満ばいで受講者は、郷土の身近かなテーマを題材にした、含蓄ある講話に深い感銘を受けたようです。本館では、この講座は非常に好評なため、来年度も開講する予定です。

山形県内博物館職員研修会の開催

本館では、県内の博物館・美術館・資料館等の職員を対象に、その質的向上を計るために、2月13日(金)、本館を会場にして研修会を開催します。

会の内容は、午前中は、開会行事のあと、本館の吉野智雄業務課長・高橋静夫学芸員が講師となり、「資料の複製とその実際」のテーマで実務実習を行い、午後には、「博物館運営の実際と問題点について」の課題で、荻野和夫県文化課長補佐を助言者をお願いし、研究協議をする予定です。是非、この機会に研修されるようご案内します。

山形県立博物館ニュース 第59号 ©
昭和56年1月26日発行
山形市霞城町1番8号(〒990)
山形県立博物館 (TEL 45-1111)